

特別企画「パーフェクトコレクション54」

Stylebook A/W

S.199

BRUTUS®

2006 10/1 特別定価 680円

それぞれの、evergreen

What's your EVERGREEN?

今回、ファッションシューティングで訪れた地、フィンランドはデザイン先進国としても知られています。新しいデザインが生まれると同時に、トラディショナルなものが尊重されている、そんな土地で活躍する3人のデザイナーが考えるエバーグリーンとは？



EERO AARNIO

エーロ・アールニオ

●デザイナー

1932年生まれ。63年、ボールチェアを製作し鮮烈なデビューを果たす。パステルチェアやポニーチェアなどポップな作品多数。ミッドセンチュリーの巨匠として、フィンランドのみならず世界中で愛される存在。

必要なデザインポキャブラリーを見極めること。

私にとってエバーグリーンなもの？ そんなもの、いくらでもあります。例えば、今机の上にあるハサミでもマチ針でも、メガネだって、自転車の車輪もそう。誰がデザインしたのか分からないけど、日常生活に密着した、なくてはならないもの。人の手によって何世代も作りつづけられ、使いつづけられているものには、そのデザインでなければ成り立たない理由があるはず。例えば車輪が四角だったら困るでしょ。車輪は昔から必ず丸。

私のデザインするものは、最初はアバンギャルドなものとして捉えられますが、結果的には定番となり、幸運にも長く作られつづけています。1966年にケルンの国際家具見本市でボールチェアを発表した時も、誰がこんな形の椅子を買うのかとディーラーに言われた覚えがあります。でも結果的には、そのフェアで100個の発注を受け、40年たった今でも作られつづけています。

「デザインを考える上で重要なこととは、素材や形に既成概念や先入観を持たないことです。新しい材料を使う時は、その材料の性質を知ることから始め、新しいものを作る時は、そのものの目的を考え、まず人間工学に基づいた使いやすさを研究します。当時、ポルトなどの素材として注目されたグラスファイバーで、読書ができるひとりの椅子を作ろうと考えた時、頑強な素材の持ち味を生かすには球体であることが理想で、外の世

界との関係を遮断するひとりのスペースを作り出すために、臍のよな形のボールチェアが生まれたんです。

モダンなものを作ろうとか、見た目の新しさばかり追いかけてもエバーグリーンとなるようなものは完成しません。常に、そのものに本当に必要なデザインポキャブラリーが何なのかを、自由に発想する力が大切なのもかもしれません。



自宅に置かれるボールチェアの試作品。特別に電話も取り付けられている。



子供用のカラフルなチェアも、アールニオ氏の定番となっている。



ヘルシンキ郊外の湖畔に佇む、アールニオ氏の自宅。もちろんサウナ付き。